

ととにまじりて雑魚のうきうき

島村 曉巳

或る日、突然妻から「連句をやってみない？」と聞かれた。その時、何故か即座に「やってみない、な」と答えた。今から思うと不思議な感じがするが、私はすんなり連句を始めると、となつた。

何故か、をや、深く掘り下げてみると、私は幼い頃から何となく俳句に馴染んでいた。父と母は「ゆく春」「海蝶」で俳句をやっていた。小学生の頃から俳誌や歳時記は身辺にあつたし、国語の時間に、芭蕉蕪村が出てくると、妙に張り切った事を覚えてる。しかし、それから四十数年間は、九十%の仕事と十%以下の家庭の多忙に紛れて、全く俳句から離れて了つていた。ところが数年前の名古屋出張の折、時間が有り、テレビ塔下のセントラルパークを散歩していた時に、一つの碑に出会った。

その碑はご存知の方も多いと思うが、芭蕉の「冬の日」五歌仙の初の一巻「狂句こがらしの」の巻の記念碑である。将に冬の日寒い朝、その碑の前に立った時、連句というものに深い興が湧いた。その足ですぐ本屋に飛び込み、求めたのが東明雅先生の名著「連句入門」であつた。帰りの新幹線の中で、第五章から読み始めた。素晴らしい！中でも表の五句目と折端の

朝鮮のほそりす、きのにはひなき 杜園

日のちりく／＼に野に米を蒔 正平
の寥々とした感覚に打たれ、機会があればチャレンジしたい、と思つていた。

こうして私は、神楽坂連句会に入れて頂くこと、なり、早くも四ヶ月が過ぎた。今は毎月の例会が待遠しくてならない。今迄色々な遊びをやつて来たが、この楽しさにはどれも敵わぬと思う。還暦を迎えた年に

この様な機会に恵まれたのは、本当に幸運であつたと思う。声を掛けて頂いた倉本路子さん、私に取次いだ妻、そして名古屋の碑に感謝している。

とは言うものの、初心者私にとつては中々大変な時間である。捌をお願ひしている新宿朝日カルチャーセンターの講師秋元正江先生、連句での精神療法の泰斗である浅野穂穂先生をはじめ、全国大会での優秀作の捌をされた面々が大勢おられ、明るく楽しくご指導願つていらっしゃるが、感心することばかりでうろ／＼している。正に雑魚のとまじりで、何とか連衆の端くれに加えて頂いている。「神楽坂連句会」何と粋で楽しい名であるか。そして句会の雰囲気も名は体を現しているのである。先ず場所は、花街のすぐ傍の赤城神社境内にある新宿区立赤城教育会館（これは不粋な名だ）。

集まる面々は八十歳の元お嬢さん三人を中心に、甥やかなご婦人十名、至つて大人しい紳士五名ほどが二つの座に分かれてワイワイガヤガヤと楽しくやつている。この句会の楽しみはもう一つある。それは「挙句の果て」の食べ歩きである。地元通の浅野先生の先導で裏通りを歩き、大いに食べかつお喋りをするのである。先日は八十歳のご婦人の「私、人見絹枝と競走して僅差の三着だったのよ！」「この主はね、昔はそれはハンサムでね、よく覗きに来たものよ」に大いに湧いた。場所が神楽坂だけに〇〇奴に箱屋の×吉といった風情だ。昨年の暮れも押し詰まつた十二月二十九日の日本経済新聞掲載の浅野先生の「連句で癒す患者の心」を拝読した。この文の末尾の「自分自身の癒し」「自分との出会い」を連句を通して実現出来る様に、肩の力を抜いて柔かに、連衆の方々とお付き合いしたい。それにしても連句に出会えて本当に良かったと、つくづく思う昨今である。

シルクロードで連句に出会う

丹下博之

平成三年春、古代東西交易路に関心を持つていた私は知人の話に飛びついて、ある旅行グループの中国・シルクロードの旅に便乗いたしました。一行は機が成田を離れるやいなや短冊状の紙を取り出し、発句だ、第三だ、やれ月前だど何やら始めるではありませんか。私にはまったく珍紛漢、初めのうちはあつげにとられておりましたが、やがて恋の呼出しという言葉にムムッ、と関心が湧きはじめ、遂には退屈しのぎのためもあつて旅の恥は掻捨とばかり一句付けてみたのであります。結局この時は三句治定されましたが、なかなかセンスいいよなど巧に煽てられたことも手伝い、ンムム連句は面白いということに相成つたわけです。

私にとつてシルクロードへの旅は同時に連句への旅立でもあつたわけです。以来、市販の連句関連の本を買集めて独習をはじめました。遊びには淫しいというものがこれまでの私のモットーでありましたが、今度ばかりはいささか勝手が違つてしましました。連句恐るべしであります。しかし本に頼つていただけでは隔靴搔痒の感はまだありません。自他場の理解のしにくさなどはその一例であります。その意味でA・C・Cで東先生はじめ多くの先輩の御指導をいただけたこと、また良き仲間と出会えたことは誠に幸いであります。

ここでざれ歌を二首。
一 連句ほど世にも煩きものはなし
自他場ジタバと夜も眠れず
二 連句ほど世にも楽しきものはなし
自他場自他場と夜も眠れず

一は学年初の頃の歌であり、二は最近の心境を歌つたものであります。

連句入門

小野シズ

頭の体操程度に考えて始めた俳句が、一向に進歩もないうちに数年ほど経つた頃、芭蕉を学ぶには連句を学ばなくてはと、俳句の師である若尾よしえさんのすすめで学び始めた連句です。少しずつ式目を教わりながら、巻き始めて、意外に面白いと思つたのが最初の感想でした。

見たり、聞いたり、触れたり、味わつたりが俳句の個の世界、しかし連句は転じがある。「恋句」あり、「月」、「花」と、人生にも似て変化し、連衆に依つて一巻が完成する。

俳句とは違つた展開が面白く、興味が湧き出したのも束の間、だんだんと連句のむずかしさを知り、知識のない私にはとても無理であろうと弱気になつたこともしばしば。それにひきかえ、捌きをされる方の才気と、素晴らしい付句を出される先輩方には驚くことばかりでした。

柏連句会で、二年間楽しく勉強させていただきました。二時間の御講義を受け、「〇〇の言葉をに入れて、一句付けてください」と言われた途端、今教わつたばかりの、会釈、連句もどこかへ行つて、何とか時間内に一句まゝめなければと、焦つてばかり。まさに「連句入門」のまいった中におります。先輩方の「連句は面白いわね」という声が聞こえても、そこに至るまでまだ道のりがありそうです。今後共、先生はじめ、皆様のご指導、よろしくお願い申しあげます。

捌まます付けの連引き
捌まます付けの連引き

豊田 好敏

本紙の編集子から、連句一座の際の挙句の付け方について書けとの依頼に、「挙句だけだったなら、私の知識の範囲内では数行で終わる」とご返事申し上げた。

それならいっそ、付句のヒントや要領などではどうか、との追い打ち。これとても古来いろいろな文献もあり、極めて難題ではあるが、諸先輩の荒波に揉まれてきた私の独断と偏見で、勝手に書くことを許して下さいるならと、埋め草に書いてみました。

○脇句から一巡まで

脇句Ⅱ発句を目立たせることを第一に考えてきたびやかに作らず、発句が小景のときは脇の大景は付かず、脇も小景にする。発句大景のときは脇も大景がよく纏まる。

第三、四句目はいろいろな教科書にある通り。一巡までは、お捌さまが直して下さるから、ともかく何か書いて小短冊で出せばよろしい。

○出勝ちは付けやすい句を選び

出勝ちになつてからは、興味をそそらぬ前句が治定されたなら、口では「なるほど結構ですね」と言いながら、「何でこんな付けにくい句を治定しやがって・・・」と心の中で思いつつ、このような時はA・C・Cで学んだすり付け、色立て、或いはなぞ解き、背景付け、リフレーション付け、哲学付け、からかひ付け、外国付けなどのアイデアを思い出して何らしきものを出しておく。

○恋句も駆け引き

恋句は二句つづきは常識だが、一句が評論的ならば、もう一句は具象的に握ったり接吻したりする句を出すように教わった。さらに誰でも知っているように、恋の二句目で笑わせることに頭をひねる。

恋離れには、政治・経済のような時事句を付けて場面を転換するのが私流のコツ。政治・経済は男女の恋の駆け引きによく似て、しかも打越しにはなりにくいことが多いので、点を稼ぐのによい手法と思う。式目上の「去り嫌い」は当然だが、気分的な輪廻、遠輪廻を意外に見落とすことが多い。

○名残の裏が近くなつたら

この辺りになると、お捌さまは連衆の句数を数えたり、鳥がないの、魚がないのとヒントを出してくれるから、そのようなものを適当に短冊に書いて出せばよい。

無常、述懐、病体などの句は、わりあい簡単だからと、私はつい口走ってしまう。「花」の句は、お捌さまから「どうぞ」と言われてから考えても、遅くない。

私は昔は「花」の句を貧弱な、寂しい、哀れな「花」を句にしてお捌さまに出したことが、しばしばあった。でもこれは、あまり良いこととは思わなくなった。連句はフィクションであるし、楽しいうちにも真剣勝負の時間を過ごすのであるから、終わり近くになって、そんなヘソまがりのことをやるものではないと思うようになり、華やかに、爛漫と咲き乱れている風景やそれに纏わる人情句が今の心境である。

挙句は、これも先生のお教え通り、発句や脇句に降らない景色で、名残の「花」の句が出たら、すぐ付けるものらしい。

S お知らせ S
猫養会主宰東明雅先生の傘寿をお祝いし、連句会を開催いたします。

▽日時 平成六年三月十三日(日)
▽場所 江東区深川芭蕉記念館
S S S S S

猫養作品集Ⅳ

校了ひとこと 下鉢 清子

猫養作品集Ⅳ上梓の運びとなり、これも会員諸氏の連句に賭ける熱意の表れとお喜び申し上げます。

昨年十一月末日の締切までに届けられた作品は、歌仙四十六篇、二十韻五十四篇、半歌仙一篇、百韻一篇に加えて、明雅主宰が新しくご考案になられた「源心」(二十八韻)四篇となりました。会員諸氏の工夫の盛られた作品の流れに、原稿整理も楽しく済み、四月上梓を目標に印刷所へ渡すことが出来た次第です。応募作品は全編を録したいとの主宰のご意向に依って、ずっしりと重みのある一冊となることでしょう。乞ご期待。

扱、会員増に伴つての作品増は嬉しい悲鳴ながら、次号からは募集方法を一考せざるを得ないだろう、との主宰のお考えも宣なること、応募方法が変わって行くと存じますがご了承下さいませ。

一月二十四日からは郵便料が大幅値上げとなり、煩雑さが加わって来ることでしょう。昨年度に倍して上梓の折には、句集頂戴のお返し用に、或いは猫養作品の良さアップピール用にと、多数お求め下さるようご協力お願いいたします。

申込先 千二七七 柏市加賀2-12-11 梅田 利子
猫養作品集Ⅳ 低価千八百円(送料別)

◇ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

一口 林義雄
五千元 桃雅会
一万円 四宮連句会
(敬称略)

◇ 発展基金随時受け付けております。よろしくお願いいたします。

振替口座 東京31550348
猫養同人会

* 連句とさかな *

松葉ガニ

杉江 杉亭

雪の便りを聞く頃になると城崎を思い出す。初めて城崎を訪れたのは二十一年許り前である。

城崎は大谿川に沿って開けた静かな温泉町である。宿は「ゆとうや」を選んだ。この宿は西村屋三木屋と並んで当地ご三家の一つである。真向いにある町営「一の湯」で旅の疲れを癒し、宿に戻ると待望の松葉ガニづくしが食卓に並んでいた。近くの香住海岸で今日水揚げされたばかりの松葉ガニは透明な碧色で食欲をそそった。先づは刺身。水々しさが何とも言えない。次に焼きガニ。こんろにのせると碧色が徐々に赤色に変じ、旨味を包みこんだ味は格別である。カニミソ、シャブシャブと続けば酒の方も進み、ふと窓外を見やれば折柄雪が深々と降っていた。

〔Q〕 仮名遣いについてお尋ねします。連句作品の仮名遣いは、旧仮名遣い、現代仮名遣いのどちらがよいのでしょうか。旧仮名遣いの場合、何か表現上のメリットがあるのでしょうか。お教えください。

(神谷 安子)

〔A〕 仮名遣いの問題は、俳句の世界でも同様で、いろいろな意見が対立しているようですが、大別すると、一、旧仮名遣い派、二、新仮名遣い派、三、新旧許容派に分れるようで、大体、文語体の俳句を主とする派では旧仮名遣いが多く、口語体の俳句を中心とする派では現代仮名遣いが行なわれるのが普通のようなです。

それはその筈で、大体、この現代仮名遣いの公布は昭和二十一年のことであり、その前書にも「このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のもに適用する」と書いてあります。

連句は口語体の句を混ぜる場合もありますが、大体は文語体なので、現在も旧仮名遣いが用いられるのは当然であり、その方が、文体と仮名遣いの間に乖離がなく、作品がすっきりするという利点があります。

ただ、現代日本の国語の実情を眺めてみますと、その旧仮名遣い(歴史的仮名遣い)を誤りなく完全に書ける人は、六十歳以上の方でしょうし、五十代・四十代・三十代と以下、年齢に反比例して、旧仮名遣いへの親密度・習熟度もうすれて行くのではないのでしょうか。それで連句は文語体だから旧仮名遣いを用いていけばよいのだと割り切ってしまうわけにも行かないのです。

現在、私自身は旧仮名遣いで作品を発表しておりますが、猫藪会の人には、これを強制するつもりはありません。現代仮名遣

いで発表されても結構です。ただ、その際には、旧仮名遣いと新仮名遣いとの混用は絶対に困ると、こればかりは強く申し入れておりますが、そうでなければ、どちらでもよいと考えております。

私の個人の経験からしても、昭和四十年代の作品集「夏の日」は現代仮名遣い、そして五十年代の「猫藪」・六十年代の「新炭俵」は旧仮名遣いでありました。この変化ははっきりとした意識に基づくものではなく、おそらく相手していた人たちの仮名遣いに順応したものでしょう。

さらに考えれば、「夏の日」時代の私の作品は何か新しく、それが「猫藪」・「新炭俵」になって、老成していることも事実のようなです。だから、仮名遣いが作品に与える効果も無視できないと思います。

しかし、それも連句は自分だけが現代仮名遣いをしようとするところでも、連衆全部がそれに賛成して、同じ歩調を取らねばならぬところに、俳句にない問題があると言えましょう。

杉内 徒司

いつの事だったか忘れたが、大庭さんと雑談していたら、

「『義仲』という句集を出したら、一冊位贈ってくれるのが礼儀じゃないかね」というから「そうですね」と私。

数日後、俳句年鑑で川崎展宏氏の電話を調べ、大津の義仲寺への寄贈をお願いした。大庭さんとは社団法人義仲寺史跡保存会常務理事の大庭勝一氏のことである。

その後何かの折に、展宏さんは私と同じ中学出身と知ったので昭和五十五年九月五日の三井武翁十三回忌に、歌仙を巻くから来ないかとさそうと、風邪だからゆけないからと清崎敏郎氏との共著『虚子物語』を送ってくれた。

そんないきさつがあったので、翌年「連句ゼミ」を企画した時は講師を依頼した。連句ゼミの第一日目(二月七日)の講義は左の通り。

連句雑感 川崎展宏

付け(七名八体等) 東 明雅

その時展宏さんが一寸言いそなった処を次の明雅さんから聞いたことがあった。「連句ゼミ」の後、お礼の意味で二度ほど展宏さん主催の「貂句会」に参加した。

その展宏さん主催の句会で知り合った森玲子さんや鈴木幸夫早大教授とはそれ以来長く連句の付き合いをするようになった。ところで明雅さんがからかったというの

は、

……只今川崎先生は「一つ家に遊女とねたり萩と月」とおっしゃったように承りましたが、それは私の僻耳だったのでしょ。うか。「遊女とねたり」ということになりますと、ますます芭蕉と遊女の結縁が

深くなって、さらにおもしろいと思いましたが、残念ながらこれは「一つ家に遊女もねたり萩と月」が正しいのでありまして、決して芭蕉と遊女が一緒に寝たわけではございません。念のため……。

(「付けの手法」 『猫藪』)

この記述が載った『猫藪』の上梓されたのは翌年の六月。それを目にした展宏さんはおかむりだという噂を耳にしたので、それ以降はすっかり疎遠になってしまった。

編集部より

○新年明けましておめでとうございます。本年も「ねこみの通信」をかわいがつて下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。○去年は、天変地異、国内外の政治経済の変動、等々、連句の題材のように多岐に渡って出来事がありました。作品には、こうした時代の変化に向き合う作者の興味があふれていますが、常に自己を新しくする連句の力のことを考えます。

○猫藪に「源心」という新形式が生まれました。新しい酒は新しい皮袋に。どのような詩心が展開されていくのか楽しみです。○今年も又色々な行事がありますが、みな様ご健康に留意され、連句の輪が大きく広がっていく年となりますよう。

季刊「ねこみの」通信 第十四号

発行者 猫藪連句会

印刷所 アトリエ・Newo

